戦争を知らない世代へ㉒長崎編

焦熱のナガサキ 8月9日

創価学会青年部反戦出版委員会

第三文明社

戦争を知らない世代へ㉒
焦熱のナガサキ—8月9日

昭和51年8月9日　初版第1刷発行

編者©　創価学会青年部反戦出版委員会
発行者　栗生一郎
発行所　株式会社　第三文明社
郵便番号　101　東京都千代田区猿楽町2-5-4
電話　東京(294)8731(代)　振替口座　東京5-117823
印刷所　凸版印刷株式会社
製本所　株式会社　星共社

落丁・乱丁本はお取り換え致します　0036-7022-4438

発刊の辞

早いもので、我々長崎青年部が四十八年に本格的な平和運動に着手して以来、今年で四年目を迎えた。四十九年に被爆体験集「ピース・フロム・ナガサキ」を出版、翌五十年に「長崎が死んだ日」そして今年、高校生の手による「ナガサキを語り継ぐ」とこの書で全四巻を数えることになる。

証言運動としては、いまだ小さな歩みではあるが、今回を含めて百二十余人の方々の被爆体験を世に問い、それなりに反戦平和への波動拡大に努めてきたつもりである。当面の目標として、第五巻までは達成したいと願っている。

さて、ここで我々の活動を振り返ってみると、被爆体験集の発刊と平和集会を軸に、原水禁一千万署名、護憲集会の開催、反戦フォーク・グループ〝ピース・セブン〟によるレコード発売など、地道ながら粘り強い運動を積み重ねてきた。そして今年、広島と協力して全国各地で「反戦反核展」を開催したのをはじめ、「劇団二十一世紀」を結成し反戦劇の初公演を行った。思えば、毎年一つか二つずつ運動の輪を広げてきた勘定になる。

その理由は、多様な現代の青年に対応するためであった。青年の多くが原爆はもとより、平和

という最重要な問題に関して、あまりに無関心層が多いことは、我々も熟知している。かといって、それも無視することはできない現状である。どうすれば、彼らの目を「平和」という課題に向けることができるのか。一つでも二つでもこちらのチャンネルを増やそう――多角的な平和運動は、こうしてはじまった。テレビ時代に生きる我々の、一つの方法論とでもいえようか。

むろん、我々はこれにけっして満足はしていない。ただ、多彩な運動のなかのどれか一つでも、青年たちが関心をもち、それを糸口として「平和」というものを真剣に受け止めてくれるようになれば、我々の試みは報われたことになる。そのなかで、青年同士の連帯を深め、平和へのアピールを強めていくことも可能であるからだ。

とまれ、今年は被爆三十一周年。三十年の大きな区切りを終えて、平和運動も新しい歴史が刻まれていくことだろう。我々もまた、自ら平和思想の体現者を目指すという一点を肝に銘じつつ、青年による被爆継承の灯をさらに高く掲げていく決意である。この一書がその導火線となることを祈ってやまない。

昭和五十一年八月九日

創価学会青年部
長崎県青年平和委員会委員長　江下敏雄

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.co

目次

発刊の辞

●第一章　語り継ごうこの体験を

四人の肉親が原爆の生けにえに……片岡八重子　10
一瞬、天地が裂けた……池田　猛　14
生と死のあいだをさ迷った一カ月……木下芳子　23
『助けて！』と手をだす人、人、人……池松誠子　28
数秒の差で光線から逃れて……松竹敏雄　32
家族の名を呼びつづけながら……大石キクエ　39
生まれる子が次々に病死……宮崎春江　45
忘れられない一本のタオル……尾上恵美子　51
死の恐怖に脅えた五年間……菅　正親　58
「兵隊さん、水をください……高尾信一　63
生きながら火に焼かれた友……吉見ミツヨ　70

●第二章　原爆許すまじ

猛火の中で救出作業……江里口末雄　76
何もかも消されてしまった……松尾三和子　79
身の毛がよだつあの日の思い出……芦北ミツエ　85
必死で水を守りぬきながら……渡部荒一　89
また、火の玉が落ちる……白石松枝　93
ああ、長崎はこれから……松元栄七　99
腹わたのように赤く燃えた空……高鍋たえ　104
犠牲者の冥福を祈る日々……山崎信子　108
生き残った私たちから反原爆の声を……横井真由美　112
一瞬にして長崎が修羅場に……松村　茂　115
悲しい思い出は私たちでたくさん……森田トシ子　119
あの時の親切は一生忘れられない……平川ハツエ　122
あの電車に乗っていたら……宮下信子　127
悪魔にとりつかれた私の青春……山崎妙子　130
亡くなった人のために生きぬこう……田端つるえ　133
心を鬼にして救護に専念……内本チマ　141

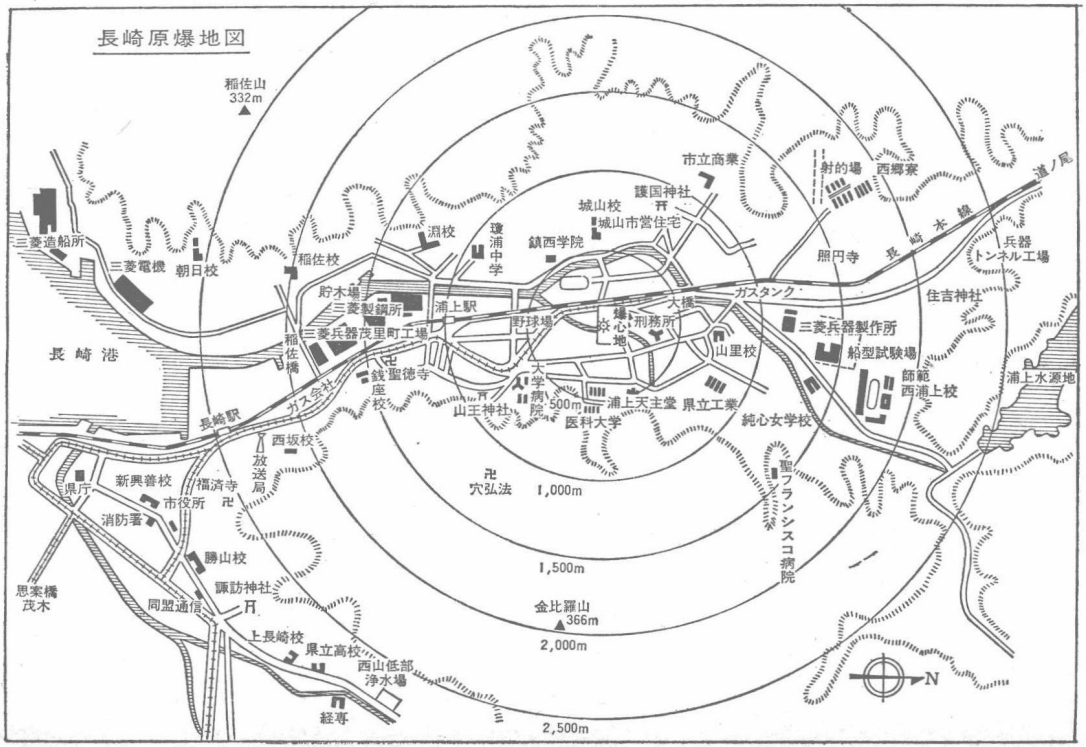
●第三章　平和のために

小学校の塀が爆風で倒壊……酒井政俊 146
ボロクズのように黒焦げの死体が……江口博子 152
二カ月も防空壕生活……嵩下幸江 155
娘とともに平和への行進……山田芳子 160
原爆の傷あと、今もなお……野口美恵子 164
戦争にあけ戦争にくれた青春……林　保子 167
手を握ると皮がつるっと……木下喜代太 172
姉の遺体を捜しにリヤカーで……木下タシ 175
逃れた列車も地獄の惨状……秋山脩子 178
目を覆うような光景が次々と……副島宗雄 181
顔はつぶれ男女の区別も……岡　満夫 185
焼跡に空をつかむ手……亀島守広 191
幼い胸に恐怖の思い出……吉田サト子 195

付記

核開発三十年の歴史……藤井英雄

あとがき


長崎原爆地図
稲佐山
332m
三菱造船所
三菱電機
朝日校
稲佐校
貯木場
三菱製鋼所
三菱兵器茂里町工場
浦上駅
淵校
瓊浦中学
鎮西学院
城山校
城山市営住宅
護国神社
市立商業
射的場
西郷寨
道ノ尾
長崎本線
兵器トンネル工場
照円寺
ガスタンク
大橋
爆心地
刑務所
野球場
住吉神社
三菱兵器製作所
船型試験場
山里校
師範
西浦上校
浦上水源地
長崎港
稲佐橋
ガス会社
長崎駅
錢座校
聖徳寺
山王神社
大学病院
500m
浦上天主堂
県立工業
医科大学
純心女学校
西坂校
放送局
穴弘法
1,000m
聖フランシスコ病院
県庁
新興普校
市役所
福済寺
消防署
勝山校
諏訪神社
思案橋
茂木
同盟通信
1,500m
金比羅山
366m
上長崎校
県立高校
西山低部
浄水場
2,000m
経専
2,500m
N

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.co

第一章　語り継ごうこの体験を

――爆心地から1.5キロ以内で被爆

四人の肉親が原爆の生けにえに

片岡八重子
長崎医大附属病院皮膚科（0.7キロ）で被爆。当時22歳

昭和二十年八月九日午前十一時、その時私は大学病院の皮膚科の医局にいました。四、五人の同僚たちと新聞を見ながら、六日の広島について話していたところでした。そうしていたところ、ブーンと飛行機の音がしました。しかし、警戒警報解除だから大丈夫、とみんなが思ったその瞬間、「あっ」という間もなく、意識を失っていくのを感じました。ああやられた……。

砂ぼこりのしずまるのを待って、しばらくして外へ出てみると、とにかく歩くのが精いっぱいで、裏のほうにあった防空壕の奥へとやっとたどりつきました。次から次へと怪我をした人が入ってきました。ほとんどの人が下半身ドロドロになって這うようにして入ってくるのでした。

「救護班はどうしてるんだ！」あっちこっちで叫び声が聞こえます。しかし、どうしようもありませんでした。外を見ると、まったくの火の海で、赤々と空を焼いておりました。その晩は、防空壕で夜を明かしました。

どのようにして家に帰ったのか、全然記憶にありません。ただ、死骸が石ころのようにごろご

ろと転がっていたのだけは鮮明に覚えています。

「あなたはどこですか！」

「上野町――」

「あそこは、もうやられてしまって何にもなかですよ――」

ある婦人から、そう言われました。でも、どうしても行きたい衝動にかられ、私の住んでいた町へ行ってみました。やはり家の跡形すらありませんでした。

死骸を抱きしめて、涙も出ないでウォーウォーと泣き叫ぶ人。やっとのことで友人と会っても「生きとったとね！」というのが、せめてものあいさつの言葉でした。

弟は本原に向かう途中の道路の溝の中で目をカッとあけたまま倒れていました。全身火傷の瀕死の重傷でした。母と必死の思いで聖フランシスコ病院に連れていきましたが、重病の人がたくさんいて受け付けてもらえず、どうにもならなくて連れ帰ったのでした。その後伯母の家で養生させてもらっていましたが、苦しいだろうに、火傷でくさった体の悪臭がみんなを悩ましているのではないかと弟はしきりに気遣うのでした。

「くさかろね。わるかね」とばかり言いつづけて、一週間後に死にました。それでも即死でなく、看病ができて良かったと思いました。弟がみつかると下の妹を探しに出ました。

何日か過ぎて、昭和町にいるのを見つけました。原爆が投下された日、隣の同級生の子と一緒

に勉強していたそうですが、「どうやって逃げたの」と聞くと、「アキ子チャンたおれてしもうて死んだとよ。京子も死ぬごたっ」というのでした。よっぽど苦しかったのでしょう。やっと生きていたのを捜しあてた妹も、八日目に息をひきとりました。傷ひとつなかったのに——。

あとからわかったのですが、ガスを浴びたパンをもらって食べたのだそうです。それで口がただれて何も食べられなくなってしまい、目に見えて元気をなくし、ついに死んでしまいました。

当時、上の妹は、護国隊に勤めておりました。大橋のほうで被爆したことはたしかですが、「諫早のほうに運ばれて行った」「足を折っているそうだ」というわさを風のたよりに聞きました。しかし、とにかく自分のことで精いっぱいで、妹のことも心配でたまらなかったのですが、どうしようもできない状態でした。そうしているうちに「妹さんは大村に運ばれた」というわさも伝わってきました。どちらが本当なのかわからないままに、死んだという連絡が入ってきました。看病もできず、最期を見届けてやることもできずに、妹は死んだのでした。どうしようもなかったとはいえ、三十一年たった今でも、心残りで身が切られるような思いです。

そういうときに母の死を迎えたのでした。原爆投下から十九日目のことでした。結局、父と母、四人の姉弟の六人の家族の中で父と私だけが、生き残ったのです。父のオバの家族は、無惨にも全滅でした。

その後も大橋の付近では、身許の知れない死体がそのまま放ってあり、くさくてくさくてたま

らない状態でした。

あの時のことは思い出したくありません。暑い最中の蛆のわいたあの体をもう二度と見たくありません。今だからこそ、少し言えるようになりましたが、できることなら忘れてしまいたい忌わしい記憶なのです。

こんな悲惨な体験は、私たちだけでもう充分です。二度と原爆を使用させてはなりません。すべての人、とくに若い人たちに強く訴えたい気持でいっぱいです。

戦争が終ってからも、元気そうにしていた友が一人、また一人と次から次に死んでいきました。現在では、知っている人がほんのわずかになりました。本当にさびしいかぎりです。やっとのことでこの原稿を書きあげました。これから先、私だけでも精いっぱい長生きしていきたいと念じています。原爆の生けにえとなった家族のためにも、亡くなられた多くの人びとのためにも……。

一瞬、天地が裂けた

池田　猛
城栄町（0.7キロ）にて被爆
当時31歳

当時、私は爆心地から約五百メートルの地点に当たる浦上川に近い城山町の市営住宅に住んでいた。古い木造の二階家だったが、母の姉で朝鮮からの引揚者である叔母と二人で移り住んでから、まだ半月とたっていなかった。叔母は私との同居にすっかり満足してなにかと私の喜びそうな心遣いをしてくれるのだが、私の心は重く落ちつかなかった。

日支事変から太平洋戦争へ移行した十年にわたる長期戦が、一億の悲願も空しく南方戦線は総崩れとなり、連日の怒濤のような大空襲に国内の主要都市はあらかた灰燼に帰するに及んで戦局は一気に最終段階に突入していったからである。すでに、軍の最後の切札である本土決戦は避けられない状勢となっていたのである。五千機の局地戦闘機を温存し、またいかに対戦車戦の民衆訓練を実施して本土決戦に備えようとも崩壊に向かいつつある民族の運命を変えることができないのは明白である。

だが血迷った軍部は、疲れ果てた国民を容赦なく駆りたてて近代装備の米軍を竹槍を持って迎

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.co